

マラルメ研究 そのⅢ

— 扇 —

中 村 衣 子

L'inverse : sont, en un repliement
noir soucieux d'attester l'état d'esprit
sur un point, foulés et épaissis des
doutes pour que sorte une splendeur
définitive simple. ("Le Mystère dans
les Lettres")

I 始めに

マラルメが1894年英国で行った講演に手を加えて翌年出版した『音楽と文芸』においては、本質的な事柄が、やや平易な言葉で語られていて興味深い。それによると、「この宇宙には、あらゆる点からあらゆる点に縦横に引かれた観念の線《l'omniprésente Ligne espacée de tout point à tout autre pour instituer l'idée》¹⁾」があり、それは揺れ動く《variations》をもっている。この《variations》を《fixer》することが、詩を書くということである²⁾。さらに、このことは次のようにも言い換えられている。「我々の精神に何気なく触れてくる事物の像や数《les aspects et leur nombre》を比較すればよい。様々のアスペクトの交差する点には、美しい何らかの姿《l'ambiguïté de quelques figures belles》が現れる³⁾」。この何かの告知を与えるアラベスクの全体を常日頃、書き記さなければならない、このようにして事物相互の関係を把握、自分の魂の状態に合わせ、その魂を思うままに拡大して、世界を単純化することが人間に出来ることである⁴⁾、と言う。

このような姿勢で事物に対面し、その意味を問うマラルメにとって、日常世界で彼の視線に留まる単純素朴な事物である扇《éventail》の光景が、彼の精神にどのような姿を映したか、即ち、彼の思考、詩的思考においてどのような構図を取り得たか、その照応関係について、扇の登場する詩の考察において、考えてみたい。このことによって、マラルメの扇の姿が明るみに出されると同時に、それと照応され

る彼の詩的思考の一樣相が確認されるであろう。こうして、いわばマラルメの日常性と観念的思考との相関関係の中に立ち現れる、マラルメの詩的夢想の一つの在り方を垣間見ることが、本論の主旨である。

さて、いわゆるマラルメの「危機」、不毛の年（1866, 7年頃）の後、数年を経て1871年パリに居を移して以来、彼は生涯かけた『総合的著作』の計画を持続させる一方で、多様な活動に赴く。1874年の約一年間、婦人向けの社交とモードの個人雑誌『最新流行』を、数々の匿名を用いて執筆・編集・刊行したことは、そのような活動の一つであるが、また、後に『折ふしの詩句』として娘夫妻により編集された夥しい数の短詩類を、肉親知人に贈り届けたりもしている。この『折ふしの詩句』において「扇」という総題の下に集められた短詩群、及び、死の直前にマラルメ自ら自作を厳選して配列構成したデマン版『S. マラルメ詩集』（1899年）に収録された二つの扇の詩の考察により、上記の問題を考えたいと思う。

Ⅱ 扇への関心

ところで、詩の考察にはいる前に、扇に関してなされたマラルメの言及を、幾つか見ておきたい。

先ず、1880年代90年代に発表された散文の集大成『ディヴァガシオン』において「書物について」の総題の下に収められた「陳列」、これは、1892年英国の新聞『ナショナル・オブザーヴァー』に発表されたものであるが、この中で、扇について以下のように書いている。

[...] l'éventail [...] cette autre aile de papier plus vive : infiniment et sommaire en son déploiement, cache le site pour rapporter contre les lèvres une muette fleur peinte comme le mot intact et nul de la songerie par les battements approché.

Cet isolateur, avec pour vertu, mobile, de renouveler l'inconscience du délice sans cause.⁵⁾

扇という、この（本よりも）一段と活発な紙の翼は、広げると無限にしかも簡略に風光を隠し、その羽ばたきにより近づく完全無欠のしかも何物でもない夢想の語の如き描かれた一輪の花を唇に向かって運び返す、この絶縁体は、自らに備わる力として動きながら、原因のない無上の歓びという無意識状態を繰返し蘇らせる、と扇は定義されている。

また同じく『ディヴァガシオン』の中の詩論、1896年『ラ・ルヴュ・ブランシ

ュ』に発表された「文芸の中にある神秘」において、

[...] l'énigme, elle ne tranche, par un coup d'éventail de ses jupes :
« Comprends pas! » [...].⁶⁾

エニグム、謎かけというこの女の「わかってないのね」と言わんばかりに何一つはっきりしたことを言わないという行為の中で、扇のようにスカートで風を送る様子が表現されている。

次に、前述のモード雑誌『最新流行』では、1874年9月6日号の「モード・宝石」欄にマルグリット・ド・ポンチという筆名で、腕輪 « bracelet » の話題に続いて、マラルメは何気なく扇に触れている。

[...] rien ne vaudra jamais un éventail, riche tant qu'on voudra par sa monture, ou même très-simple, mais présentant, avant tout, une valeur idéale. Laquelle ? celle d'une peinture : ancienne, de l'école de Boucher, de Watteau et peut-être par ces Maîtres ; moderne, de notre collaborateur Edmond Morin.⁷⁾

ブッシエ、ワトーなど18世紀ロココ芸術との関連において、何物も扇ほど価値のあるものはなく、その組み立てにおいて豊かであり、単純だが理想的な価値を示す、と女性のおしゃべりの口を借りて扇は、語られている。

さらに、実は前述した幾つかの扇の詩以外の詩篇において、« éventail » ないしそれに類する語が、興味深く現れている。共にデマン版『S. マラルメ詩集』に収録された、その二つの例を次に挙げたい。

1862年に « Placet » と題され『パピヨン』に発表された初期の詩、「徒な願い」における、Amour ailé d'un éventail⁸⁾（扇の翼に飛ぶ愛神）、

1890年、マラルメの友人の画家ホイッスラーが主宰していた諧謔味の濃い新聞とされている英国の『旋風』と、ベルギーの雑誌『ワロニー』に同時に発表された「ホイッスラーへの私信」における、que puisse l'air / De sa jupe éventer whistler⁹⁾（ホイッスラーを、（踊り子の）スカートから出る風でそよそよと煽ぐために）、という二例がある。

このように、荘重に暗示深く、あるいは、軽やかに遊戯的に、マラルメに処々に現れる扇 « éventail » への関心が、数々の扇の詩におけるイマージュの変奏の重ね合わせを通して、どのように明確に透かし眺められ得るかを見てゆきたい。

Ⅲ 扇の詩

先ず、デマン版『S. マラルメ詩集』における最初の扇の詩「マラルメ夫人の扇」を考察したい。この考察は、本小論の主旨に従って問題となる点を中心にのみなされるが、以下、詩の考察については同様である。

Eventail

de Madame Mallarmé

Avec comme pour langage
Rien qu'un battement aux cieux
Le futur vers se dégage
Du logis très précieux

Aile tout bas la courrière
Cet éventail si c'est lui
Le même par qui derrière
Toi quelque miroir a lui

Limpide (où va redescendre
Pourchassée en chaque grain
Un peu d'invisible cendre
Seule à me rendre chagrin)

Toujours tel il apparaisse
Entre tes mains sans paresse.¹⁰⁾

この詩において、扇は翼≪aile≫となり、天空を目指す羽ばたき≪battement≫として古巣を離れる未来の詩と結ばれる。ひそやかな≪courrière≫≪messenger≫使徒としての≪aile≫は、鏡の想念を喚ぶが、その鏡は「輝いた」過去のものであり、また「眼に見えない灰が少しずつ吹き飛ばされて沈んでゆくであろう」未来のものである。¹¹⁾扇を透かしてこの≪quelque miroir≫縁取りのない「何らかの鏡」マラルメの意味するところの「不在化された鏡」が明滅する。この鏡の光の明滅の中で、「もしそれがそれであるなら」と、現在性を免れた仮設の扇が、≪aile≫として羽ばたく。マラルメにとっては、事物は現在性を帯びている限り不純であった。¹²⁾≪aile≫によるこの無限定の流動が続いてほしい、空の彼方への羽ばたきであり続けてほしい、と終りない扇の振動が空間の中で続く様が現れたシェイクスピア型ソ

ネで、最後の二行は、想念のまとめの如き感をもっている。これは、もと扇面に書かれたものであり、1891年『ラ・コンク』には、単に≪Eventail≫と題されて発表された。

自らを映す「鏡」、燃えつくされた後に残る「灰」は、「空間」と共にマラルメ独自に詩的意味を担うものである。主に「エロディアード」「イジチュール」等の考察の上で詳細な深求がなされ得るであろう。

次に、続いて同詩集に配列された「マラルメ嬢の扇」を考察したい。

Autre Eventail
de Mademoiselle Mallarmé

O rêveuse, pour que je plonge
Au pur délice sans chemin,
Sache, par un subtil mensonge,
Garder mon aile dans ta main.

Une fraîcheur de crépuscule
Te vient à chaque battement
Dont le coup prisonnier recule
L'horizon délicatement.

Vertige! Voici que frissonne
L'espace comme un grand baiser
Qui fou de naître pour personne,
Ne peut jaillir ni s'apaiser.

Sens-tu le paradis farouche
Ainsi qu'un rire enseveli
Se couler du coin de ta bouche
Au fond de l'unanime pli!

Le sceptre des rivages roses
Stagnants sur les soirs d'or, ce l'est,
Ce blanc vol fermé que tu poses
Contre le feu d'un bracelet.¹³⁾

この詩においては、マラルメの特に愛好した時間、「夕暮れ」、すべてが終りまだ何も始まってはいない黄金≪or≫¹⁴⁾の時、「夕暮れ」に、やはり≪aile≫となった扇

が、その「羽ばたき」《battement》により空間を喚ぶ。《horizon》は少しずつ《fraîcheur》の動きにより連動し、その連動が合体を目指す。《grand baiser》として、合体を求めて現れた《espace》は、しかし同等の相手を見出せず生れ得ない。「ほとばしり出ることも鎮まることも出来ない」行く先のない《grand baiser》から作られた近づきたい《paradis》は、包みかくされた微笑《rire》として扇の一樣の襞《pli》に吸収される。閉じられ留まる扇、自分自身に重なる《pli》、《ce blanc vol fermé》は、今、黄金の夕べの薔薇色の岸边に浮かぶ王笏《sceptre》と化して、腕輪《bracelet》の火《feu》と共に輝きを放つ。瞬間の夢想の国の支配の輝く《sceptre》として《fixer》される。この暗く美しく流れゆくオクトシラブルのオードは、二節目の意味の高まりと消失を経て、五節目で《ce l'est》《bracelet》と特異に豊かな押韻を伴い、無声摩擦子音[S]の《allitération》を響かせながら、《bracelet》との《co-scintillation》中で結晶する。これも扇面に書かれたものであるが、1884年『ラ・ルヴュ・クリティック』においても、1887年の初版詩集においても、単に《Eventail》と題されていた。

ここに見られる「空間」と「愛」の想念、宝石の《feu》、「微笑」は、また深くマラルメの詩想を担い、詳細な研究がなされ得るものである。

次に、マラルメの死後、1920年、娘ジュヌヴィエーヴとその夫エドモン・ボニオ氏によって整理・編集された『折ふしの詩句』において、「扇」の総題の下にまとめられた短詩群¹⁵⁾ 17の4行詩と一つの二行詩について考察したい。これらは、扇面に書かれ、肉親知人達に贈られたものである。

まず、本論の主旨に即して、特に興味深い詩を七篇と、他の詩の幾つかの部分を取り出してみると以下の如くである。

II

A Mlle G. M.

Jadis frôlant avec émoi
Ton dos de licorne ou de fée
Aile ancienne, donne-moi
L'horizon dans une bouffée.

III

Bel éventail que je mets en émoi
De mon séjour chez une blonde fée

Avec cette aile ouverte amène-moi
Quelque éternelle et rieuse bouffée.

V

Toujours ce sceptre où vous êtes
Bal, théâtre, hier, demain
Donne le signal de fêtes
Sur un vœu de votre main.

VII

A Mlle Geneviève Mallarmi.

Là-bas de quelque vaste aurore
Pour que son vol revienne vers
Ta petite main qui s'ignore
J'ai marqué cette aile d'un vers.

IX

A Mme Georges Rodenbach.

Ce peu d'aile assez pour proscrire
Le souci nuée ou tabac
Amène contre mon sourire
Quelque vers tu de Rodenbach.

XV

A Mme Grivollet.

Palpite,
Aile,
 mais n'arrête
Sa voix que pour brillamment
La ramener sur la tête
Et le sein
 en diamant.

XVII

A Mme de R.

Fermé, je suis le sceptre aux doigts

Et, contente de cet empire,
Ne m'ouvrez, aile, si je dois
Dissimuler votre sourire.

- I. Aile quels paradis élire
- XI. Avec la brise de cette aile
- XII. Aile que du papier reploie
- XIV. Aile du Temps tu te refermes
- XVI. Aile, mieux que sa main, abrite

18の短詩のうち、12の詩において、扇は「aile」として現れ、またその閉じられた姿、「sceptre」と化しあるいは「diamant」において輝く。

扇の「aile」は、空間、「horizon」(II)、「ciel」(XIV)、「quelque vaste aurore」(VII)、「cet empire」(XVII)、「quels paradis」(I)、と関連づけられ、「bouffée」(II, III)、「brise」(XI)を介して、「amener」(III, IX)、「ramener」(XV)、「revenir」(VII)、「reployer」(XII)、「palpiter」(XV)と、扇の往復運動によって、少しずつの相互浸透を繰り返す。そして閉じられ留まる「aile」は、「sceptre」と化して「empire」を支配し(XVII)、「詩人の思うがままの孤独な祝祭」である「fête」を司どり(V)、また、中央で宝石の「diamant」と共に輝き固定する(XV)。

ところで、ここでもマラルメが独自の使い方をする「何らかの」「quelque」という、現在性を帯びない不限定の一種の冠詞に、しばしば縁取られていること(III, VII, IX)や、多く命令法や条件節を伴う、いわば現在性を帯びない仮設の表現としてあること(I, II, III, VI, X, XI, XV, XVII)、いついかなる時でもという不限定の時間をもつこと(V)が、顕著な特徴と思われる。

また、前の詩同様、マラルメにおいて夢想と関連する「微笑」、及び夢想自体の気分が漂うことも(「Ton dos de licorne ou de fée」(II)、「une blonde fée」(III)、「Quelque éternelle et rieuse bouffée」(III)、「Amène contre mon sourire」(IX)、「Dissimuler votre sourire」(XVII)、「rêverie」(VIII)、「Ton rire qui sait rêver」(XIII)、「souriante et farouche」(XVIII))注目され得る。

さらに、前の詩同様、これらの詩においても、人間の体の現れが、その部分、頻繁には手、指、「main」(V, VII, XIV, XVI)、「doigts」(XVII)(その他「dos」II, «tête, sein」XV, «front」X)であり、かつ、それらがことさら描写されない時、この「métonymie」は、ただ扇の姿を巨大に空中に息づかせるのに効果的

であると言えるであろう。

それぞれ語られる内容らしい内容は特にはなく、前記の往復運動を示す動詞の他には、《fermer》《ouvrir》(XVII)、《se refermer》(XIV)、《arrêter》(XV)や《frôler》(II)、《effacer》(XI)、《dissimuler》(XVII)、《abriter》(XVI)、《carresser》(X)、《battre》(XII)、《donner》(II, V)等、扇の開閉及びそのための運動ないし、それらの時それらにより生じる運動を示す動詞が見られるなど、扇の振動、停止、開閉にまつわる状態のみへのマラルメの執拗な関心が、うかがわれる。

Ⅳ 扇の現れとその背景

このような扇をめぐるのイメージの変奏において、扇は、マラルメの視線によって、その部分的性質である「フォルムと運動」としての《aile》の姿で、分離抽出されて現れていると言えるであろう。具象的な描写は退けられ、マラルメの視線により、扇のもついわば単に偶有性というべきものが、部分拡大され現れていると言えるであろう。

ところで、このような《aile》が、また二つの様態としてマラルメの関心に留まっていることに注目したい。その一つは、開かれ振動を続ける扇としての《aile》であり、他の一つは、それ自身の内部に折りたたまれた襞《pli》としてある閉じられ留まる《aile》である。開かれ運動する《aile》は、《vol, envol》「飛翔」し、《battement, vibration》「振動」し、《va-et-vient》「往復運動」するものとして現れ、閉じられ留まる《aile》は、《sceptre》「王笏」と化し固定し、《diamant》「ダイヤモンド」と一体化して、瞬間の輝きを放つ。

さらに、これらの現れが、広大な空間と、扇の振動及び扇との連動により、少しずつの相互浸透を続け関係を保っていること、また、特徴として時間的に過去と未来の仮設としてあり、現在化していない時をもつこと、さらに、同様にマラルメの詩的思考にとって極めて貴重な意味を担う事象、鏡、灰、愛、微笑、夢想、祝祭の背景の中に持ち手の人間の支配から離れ大きく息づいていることが注目され得る。

この空間、時間、幾つかの上記の事象については、それぞれ相互に関連を保ちながら、マラルメの詩的思考において詳細な探求がなされなければならない。このそれぞれにその歴史をもち絡み合う詩的要素については、今これを詩的背景として置き、本小論では、マラルメの関心に即した扇の二つの現れの仕方から、論を進めてゆきたい。

V 詩的思考の一樣相との照応

このような詩的背景において二つの様態を持つ《aile》というマラルメの関心と、彼の詩的思考の一樣相とのひとつの照応関係について、ここで探求したい。マラルメによれば、「現実は何かの暗示¹⁶⁾」であり、「語るということは、事物の現実に対して、交換的にしか関係をもたず、文学にあっては事物に対して《allusion》を作ること、あるいは、何らかの観念《quelque idée》が全体の中にその一部として組み入れるような事物の特質を分離抽出すること¹⁷⁾」が問題であるということであるが、この時、今、執拗に繰り返されるこのマラルメの関心に応じたこの《aile》の姿から、そのような特質について即ち、「交換関係」を探求することが可能であると思われる。

実はマラルメには様々の《aile》があった。

Le vers va s'émouvoir de quelque balancement, terrible et suave, comme l'orchestre, aile tendue ; [...].¹⁸⁾

詩句は、《aile》翼を一杯に張って恐ろしく甘美な《quelque balancement》をもって、自ら感動するであろう、というこの文章の《aile》もあり、また、「危機」の時「非人称」《impersonnel》への戦いがある上で行われたという骨張った翼《aile osseuse》¹⁹⁾もあり、文学の高度の翼の戯れとして表現された《jeu d'aile》²⁰⁾もあり、さらに当然、鳥、白鳥をも、《plume》をも想起させる《aile》もある中で、今この扇の《aile》をめぐる執拗なマラルメの関心の在り方に即して、即ち扇の《aile》の二つの様態に従ってその意味をみてゆきたい。

扇の運動する《aile》が、その瞬間において《vol, envol》であり、その持続において《battement, vibration》であり、その持続の性質において《va-et-vient》、「行き同じだけ戻る」往復運動である時、それは、それらの抽象性において、マラルメの詩的思考の数々の表現における同価値の一樣相と照らし合わされ得る。その例を今、一、二例ずつみてゆきたい。

先ず《vol, envol》「飛翔」、これは、マラルメの「詩」に関わるものの一つの性質及び形象として実に多く、様々に現れているものであるが、今、他の具体的事象と関連をもたない端的な表現におけるそれを挙げたい。

[...] elle (Poésie), toujours restera exclue et son frémissement de vols

autre part qu'aux pages est parodié, [...]

L'écrit, envol tacite d'abstraction, reprend ses droits en face de la chute des sons nus : [...].²¹⁾

« Poésie », 「詩」は、飛翔 « vol » の羽ばたきをもつものであり、また書いたものは、抽象の無言の飛翔 « envol » であると言う。

ここに既に、次の概念「振動」が現れてもいるが、続いてより明確な表現における、« vol, envol » の持続、« battement, vibration » 「振動」の概念の表現の考察に移りたい。

A quoi bon la merveille de transposer un fait de nature en sa presque disparition vibratoire selon le jeu de la parole, cependant ; si ce n'est pour qu'en émane, sans la gêne d'un proche ou concret rappel, la notion pure.²²⁾

このあまりに有名な文章において、詩語が、——たとえば「花」という語があらゆる花束に不在の甘美な花としての——その « notion pure » 「純粹觀念」を放射するのは、詩語の « vibration » によってである、と詩語の消滅への振動が見られる。

Autre chose ... ce semble que l'épars frémissement d'une page ne veuille sinon surseoir ou palpiter d'impatience, à la possibilité d'autre chose.²³⁾

また次のこの文章においては、« autre chose », 即ち「詩」の求める「何か別なもの」に至る時の、書物のページの「振動」が表現されている。

そして、それらの「振動性」は、そのもつ性質としての相互交換性、推移、転換、置換の継起・継続、また言い換えれば、ある傾斜とそれに対する反動、具体的事物による表象としての「振子」運動として、即ち、単純にかつ永遠に、それ自体の力によって持続する自己培養の内的運動として、マラルメの詩的関心に映ると言えるであろう。その様子を以下に見てみたい。

L'oeuvre pure implique la disparition élocutoire du poète, qui cède l'initiative aux mots, par le heurt de leur inégalité mobilisés ; ils s'allument

de reflets réciproques comme une virtuelle traînée de feux sur des pierreries, [...].²⁴⁾

—Lés mots, d'eux-mêmes, s'exaltent à mainte facette reconnue la plus rare ou valant pour l'esprit, centre de suspens vibratoire ; qui les perçoit indépendamment de la suite ordinaire, projetés, en parois de grotte, tant que dure leur mobilité ou principe, étant ce qui ne se dit pas du discours : prompts tous, avant extinction, à une réciprocité de feux distante ou présentée de biais comme contingence.²⁵⁾

[...] dans le poème, les mots — [...] — *se reflètent les uns sur les autres jusqu'à paraître ne plus avoir leur couleur propre, mais n'être que les transitions d'une gamme.*²⁶⁾

以上において、詩人が語りながら消滅した後の詩内部の詩語の状態、宝石の火を想わせる相互反射による運動「ils s'allument de reflets réciproques」(24)、相互交換の振動、置換「avant extinction, à une réciprocité de feux」(25)、相互反射による推移(26番イタリック体の部分)が見られ、さらに、

[...] des motifs de même jeu s'équilibreront, balancés, à distance, [...]. Tout devient suspens, disposition fragmentaire avec alternance et vis-à-vis, concourant au rythme total, lequel serait le poème tu, aux blancs ; seulement traduit, en une manière, par chaque pendentif.²⁷⁾

一つの作品の内部の「等価な幾つかのモチーフ」は、相互に交互に向い合い「avec alternance et vis-à-vis」、均衡をとり振動しながら「balancés」、*« le poème tu »*「沈黙の詩」を支えている様子がここで表現されている。

また今や貴重な資料となった以下においては、

[...] C'est, titre d'une interminable étude et série de notes que j'ai là sous la main, et qui règne au dernier lieu de mon esprit. Tout le mystère est là : établir les identités secrètes par un deux à deux qui ronge et use les objets, au nom d'une centrale pureté.²⁸⁾

「centrale pureté」「中心の純粹」のために、次々と同一性を打ち立ててゆくという置換・転換の継続の相互性が、明晰に語られ、また、

faite d'une double identité / équation ou idée / si ceci est cela / cela est ceci²⁹⁾

この資料においては、同一性の立証が、相互交換性の « balancement » において明示されている。

また、次のように、

Telle portion incline dans un rythme ou mouvement de pensée, à quoi s'oppose tel contradictoire dessin : [...].³⁰⁾

一つの傾斜が別のそれに対抗する傾斜をよぶというこの精神の構図や、『イジチュール』における、「時」の生成を刻むと同時に廃滅を刻み続ける、単純に永遠に自己内部で養われ続けてゆく振り時計の « balancement » 往復運動、« va-et-vient » への執着もここで想起されるであろう。

このようなマラルメの詩的思考及び精神に顕著に認め得る、飛翔、それによる振動性、そこにおける往復運動、即ち単純に永遠にそれ自体によって持続し得る往復運動である振動の様相を、今このマラルメの扇、それ自体の力として動き、『折ふしの詩句』において開いている限り動き続け、『マラルメ夫人の扇』において揺れ動き続けるよう願われた扇、一輪の無言の花を唇に運び返すというマラルメの扇、の振動性に重ね合わせ透かし見ることが出来ると思われる。

それでは、この時、それ自体の内部に閉じられた « pli », 閉じられ留まる扇の « aile », その組立てにおいて豊かであるというマラルメの扇の « aile » は、それが夕暮れの黄金に浮ぶ « stagnation », 瞬間の幻影の白い即ち純粋な輝く固定であった時、それは、彼の詩的思考においてどのような想念の関連を持ち得るであろうか。

実は既に見た引用の 22, 23, 25, 27, 28 番において、それぞれ振動性の只中に目指されたある中心というべきものがある。それは « notion pure », « autre chose » により暗示されるものであり、より明確には « centre de suspens vibratoire » 「振動性をもつ宙吊りの中心」であり « le poème tu » 「沈黙の詩」であり « centrale pureté » 「中心の純粋」、« être » (« C'est ») 自体と表現されたものである。

Pour moi, la Poésie me tient lieu de l'amour parce qu'elle est éprise d'elle-même et que sa volupté d'elle retombe délicieusement en mon âme ; [...].³¹⁾

[...] J'aime les roses, j'aime l'or du soleil, j'aime les harmonieux sanglots des femmes aux longs cheveux, *et je voudrais tout confondre dans un poétique baiser !*³²⁾

[...] un éclat, fulgurant, l'instant de la résurrection et des baisers, miré par chaque bijou en possession de tous ses feux.³³⁾

あるいは、上記のように「愛」と「詩」との相関関係において、《baiser》の瞬間の《éclat》として《bijou》宝石の火《feu》を通して透かし見られる、と表現される等、様々なところで様々なニュアンスをもって、相似た表現が、この同等の概念に与えられているのであるが、最も全体的な表現として次の文章を引用したい。

Ainsi lancé de soi le principe qui n'est — que le Vers! attire non moins que dégage pour son épanouissement (l'instant qu'ils y brillent et meurent dans une fleur rapide, sur quelque transparence comme d'éther) les mille éléments de beauté pressés d'accourir et de s'ordonner dans leur valeur essentielle.³⁴⁾

それは、「詩」が美の要素を引きよせ同時に解き放つ運動の内に生れる、「エーテルのような何らかの透明《quelque transparence》に浮ぶすみやかな花《fleur rapide》の内の輝く幻影と幻滅の瞬間の開花」であり、またそれは、次に続く以下の文章によるところの、

Signe! au gouffre central d'une spirituelle impossibilité que rien soit exclusivement à tout, le numérateur divin de notre apothéose, quelque suprême moule qui n'ayant pas lieu en tant que d'aucun objet qui existe : [...].³⁵⁾

《suprême moule》^{ネガティブ}「至高の鑄型」である。それは、また以下のようにも的確に表現された。

Lui, quelqu'un! [...] un fait spirituel, l'épanouissement de symboles [...] [...] le fictif foyer de vision [...] [...] dans quelque éclair suprême, d'où s'éveille la Figure que Nul n'est, [...].³⁶⁾

「視覚の虚焦点」における「精神的事実」であり、*«quelque éclair suprême»* 「何らかの至高の稲妻の輝き」の中の「何物でもない姿*«Figure»*の現前の時」であり、即ち不在性の現前の時である。マラルメの文芸の「成就の時」は、このように両義的瞬間として表現された。また、この一撃の瞬間の火の輝きの時、生成であり同時に解体であるこの瞬間の固定の時は、その固定のみにおいても、次のように手紙の中でふとした機会に暗示深く表現されもして、マラルメのそれへの根深い執着を示した。

[...] la mélodie en est une ligne fine, comme tracée à l'encre de chine, et dont l'apparente fixité n'a tant de charme que parce qu'elle est faite d'une vibration extrême.³⁷⁾

詩のメロディーは、中国の墨で書かれたような細い線であり、その見かけ上の固定*«fixité»*は、極度の振動*«vibration»*から作られている故に魅力がある、と言う。

深く常に、ほとんどあらゆる詩的経験というべき時に、マラルメに根ざしたこの関心、この振動の内の瞬間の幻影としての固定、それ自体として*«fixer»*固定し留まり輝くこの時を、今*«Autre Eventail»*の最後、折りたたまれた紙の襞の瞬間の固定における輝き、*«ce l'est»*「それはそれ」とたたみかけられ*«bracelet»*腕輪の火*«feu»*と共に、白く即ち純粋に、即ち不在の輝く固定をなした夢幻の岸辺の*«sceptre»*と化した*«aile»*の見事な結晶の中に想起し得ると思われる。また、『折ふしの詩句』においては、*«sceptre»*は、あるいは、この純粋な架構の時、両義的瞬間に他ならない「詩人の思うままの孤独な祝祭」*«fêtes à volonté et solitaires»*³⁸⁾である*«fête»*を司どり、また*«empire»*を支配して現われ、あるいは、*«diamant»*、文芸の全き姿の形容として現れもした「ダイヤモンド」³⁹⁾に収約され重ね合わされ現われて、振動性の内に固定され輝いている。

ここに、数々の扇の*«aile»*の*«variation»*を通して、一貫したマラルメの関心に基くマラルメの抽象の視線により現れるこの「揺れ輝き留まる*«aile»*」が、「厳密な意味で想像力豊かな、抽象的な、従って詩的である精神」*«strictement imaginaire et abstrait, donc poétique»*⁴⁰⁾と定義するマラルメにおいて、その詩的思考との照応関係において、その関係を注ぎ込まれ刻み込まれてよみがえる姿を見ることが出来ると思われる。

Ⅶ 終りに

日常世界において対面し凝視し、その意味を問うたであらう事物、扇 *« éventail »* が、今、名指されて、通常の扇、あるいは過去の諸々の扇の事物性から遠く離れ、全く新しい雰囲気の中にひたって、(*« la réminiscence de l'objet nommé baigne dans une neuve atmosphère »*)⁴¹⁾ マラルメにおける固有の姿として、その抽象性において、詩的想念との関連で充たされ立ち現れる様子を見ることが出来るであろう。扇に流れる想念は、マラルメの関心に従って、執拗にやや断片的な風景の中で繰返され『折ふしの詩句』の中にあり、また彼自身の選択・構成による49の詩篇の中の二篇として唯一の詩集、『S. マラルメ詩集』に収められるべき貴重なものであったと言えるであろう。

この小論の始めに触れた『音楽と文芸』において、マラルメは次のように語り継ぐ。

Avec véracité, qu'est-ce, les Lettres, que cette mentale poursuite, menée en tant que le discours, afin de définir ou de faire, à l'égard de soi-même, preuve que le spectacle répond à une imaginative compréhension, il est vrai, dans l'espoir de s'y mirer.⁴²⁾

あの *« quelques figures »* を垣間見させる光景、そのような光景が、それに呼応する想像力豊かな抽象的な精神の中に姿を映すということを証明することが、文芸の在り方に他ならないと続ける時、この描写されるのではなく、非事物化され抽象化され、ある観念との運動を保ちながら、なおその事物自体における優雅の抒情を匂わせて振動を続け、留まり輝く *« aile »* と化したこのマラルメの扇は、様々の *« aile »*、白鳥の *« aile »*、「無限を宿す、ぜいたくな楽しみを宿す」というレースの襷 *« pli »*、⁴³⁾「書物」のページの折りたたまれた *« pli »* *« repliement »*、⁴⁴⁾ 宝石箱たる「墓」⁴⁵⁾ 等と、それぞれに事物に応じて変じた様相、アスペクトを輝き交わし絡み合いながら、世界に拡散し、「宇宙の万象の諸関係の総体」⁴⁶⁾の中に組み込まれ、そこに充溢してゆく図柄として見る事が出来るであろう。このような関係において、扇の「揺れ輝き」に、マラルメの詩的思考における本質的属性と言うべき動性、相互的動性、振動性とそこに現れる固定、との照応を透かし見ると言う、マラルメの「抽象の視線」による詩的夢想の一つの切子面 *« facette »* が、ここに開示されるであろう。

[註]

- 1) *La Musique et les Lettres* O.C., p. 648. (1894年. マラルメ 53才)
- 2) *Ibid.*, p. 648.
- 3) *Ibid.*, p. 647.
- 4) *Ibid.*, p. 647.
- 5) «Quant au Livre» O.C., p. 374.
- 6) «Le mystère dans les Lettres» O.C., p. 383.
- 7) *La Dernière Mode* O.C., p. 714.
- 8) «Placet futile» O.C., p. 30.
- 9) «Billet à Whistler» O.C., p. 65.
- 10) O.C., pp. 57–58. Mauron のこの詩の考察は興味深い。(Mallarmé *l'obscur* pp. 92–93).
- 11) Jacques Scherer, *L'Expression littéraire dans l'oeuvre de Mallarmé*, Nizet, 1947, p. 58 («parenthèse»についての解釈が見られる。)
- 12) この時間性については、稿を改めて論じなければならないが、今端的な二例を挙げると、「書物について」及び「ミミック」に「現在性」についての興味深い言及が見出される。
- 13) O.C., p. 58 Michaud, Thibaudet は、この詩をすぐれた詩論の詩であるというが、分析は見られない。Richardの分析はすぐれていると思われる。(*L'Univers imaginaire de Mallarmé*, pp. 309–313.)
- 14) «or»については稿を改め、他との関連において詳細に論じたい。
- 15) O.C., pp. 107–110, 扇の詩については、もう一つプレイアード版に収められた死後出版の(メリー・ローランへの)「扇」がある。この詩においても、扇は«aile»として現れ、花の想念と結びつき、興味深い表現としては、«Cette frigidité se fond / En du rire de fleurir ivre»が挙げられるであろう。『折ふしの詩句』中の扇の詩の考察については、本稿で以下、«aile»の現れのあるものを中心に(本論で問題化された事柄とそれぞれの短詩の内容との関係、及び詩内のコンテクストに応じて)なされる。観点は全く別であるが、これらの扇の詩についての考察が、Chassé, *Les Clefs de Mallarmé*, pp. 219–234に見られる。また、Richardの *L'Univers imaginaire de Mallarmé* において処々に分散して扇の詩の考察が見られる。
- 16) «Crise de Vers» O.C., p. 366, (*La Musique et les Lettres* O.C., p. 645).

- 17) Ibid., p. 366.
- 18) *La Musique et les Lettres* O.C., p. 653.
- 19) Correspondance I, p. 241.
- 20) « Le Mystère dans les Lettres » O.C., p. 386.
- 21) Ibid., p. 385.
- 22) « Crise de Vers » O.C., p. 368.
- 23) *La Musique et les Lettres* O.C., p. 647.
- 24) « Crise de Vers » O.C., p. 366.
- 25) « Le Mystère dans les Lettres » O.C., p. 386.
- 26) Correspondance I, p. 234.
- 27) « Crise de Vers » O.C., pp. 366–367.
- 28) Correspondance IV*, pp. 292–293.
- 29) *Igitur* O.C., p. 429.
- 30) « Crayonné au Théâtre » O.C., p. 328.
- 31) Correspondance I, p. 243.
- 32) « Symphonie littéraire » O.C., p. 264.
- 33) « Le Mort vivant » O.C., p. 615.
- 34) « Crayonné au Théâtre » O.C., p. 333.
- 35) Ibid., p. 333.
- 36) « Richard Wagner » O.C., p. 545.
- 37) Correspondance I, p. 270.
- 38) *La Musique et les Lettres* O.C., p. 647.
- 39) « Quant au Livre » O.C., p. 373.
- 40) « Richard Wagner » O.C., p. 544.
- 41) « Crise de Vers » O.C., p. 368.
- 42) *La Musique et les Lettres* O.C., p. 648.
- 43) « Quant au Livre » O.C., p. 370.
- 44) Ibid., pp. 379–381.
- 45) Ibid., pp. 379–381.
- 46) « Crise de Vers » O.C., p. 368, « Quant au Livre » O.C., p. 378.

[参考文献]

— テクスト —

- Mallarmé (Stéphane), *Oeuvres complètes*, Gallimard, 1945 (註において O. C. と略す)
 Mallarmé (Stéphane), *Correspondance*, Gallimard, I, 1955, II, 1969, III, 1969, IV, 1973.

— 研究書目 —

- Bachelard (Gaston), « La Dialectique Dynamique de la Rêverie mallarméenne » in *Le Point*, Toulouse février-avril, 1944.
 Blanchot (Maurice), *L'Espace littéraire*, Gallimard, 1955.
 ————, *Le Livre à venir*, Gallimard, 1959.
 Chassé (Charles), *Les Clefs de Mallarmé*, Aubier, 1954.
 Chastel (André), « Le Théâtre est d'essence supérieure » in *Les Lettres*, 9—10—11. 1948.
 Derrida (Jacques), *La Dissermination*, Seuil, 1971.
 Genette (Gérard), *Figures I*, Seuil, 1966.
 Mauron (Charles), *Mallarmé L'obscur*, Corti, 1968.
 Michaud (Guy), *Mallarmé, L'Homme et l'Oeuvre*, Hartier-Boivin, 1958.
 Mossop (Deryk), « L'Exégèse mallarméenne » in *Colloque Mallarmé*, Nizet, 1975.
 Poulet (Georges), *Etude sur le Temps humain II, La Distance intérieure*, Plon, 1952.
 ————, *La Métamorphose de Cercle*, Plon, 1961.
 Raymond (Marcel), *De Baudelaire au Surréalisme*, Correa, 1933.
 Richard (Jean Pierre), *L'Univers imaginaire de Mallarmé*, Seuil, 1961.
 ————, *Microlectures*, Seuil, 1979.
 Scherer (Jacques), *L'Expression littéraire dans l'Oeuvre de Mallarmé* Nizet, 1947.
 Thibaudet (Albert), *La Poésie de Stéphane Mallarmé*, Gallimard, 1926.
 Weber (Jean Paul), *Genèse de l'Oeuvre poétique*, Gallimard, 1960.

[後 記]

本論文中の引用の翻訳に関しては、鈴木信太郎氏、松室三郎氏、南条影宏氏、

清水徹氏，渡辺守章氏他の極めてすぐれた諸業績を参照させていただいた。この小論の内容に即して，自分なりに変更を加えあるいは新たに訳出したが，既出の諸邦訳から大きな影響を受け，多くの益を得たことを，深い感謝の念をもってここに記しておきたい。

また京都大学においてマラルメ詩の講義を二年にわたり行われた三好郁朗先生からも御助言をいただき多くを学び得た。ここに一言お礼の言葉を申し添えさせていただきたい。